東日本大震災における伝統と復興に関する一考察
―岩手県九戸郡野田村のなもみの事例から―

北島　実佳

本研究は、2011 年 3 月 11 日に発災した東日本大震災で被災した地域の災害復興過程において、被災地の伝統が復興にどのような影響を与えているのか、また、伝統を災害復興に生かしていくことができるかという点について検討することを目的とする。調査対象を東日本大震災の被災地の岩手県九戸郡野田村の伝統行事である「なもみ」とし、インタビュー調査と参与観察により、野田村の災害復興過程において「なもみ」 がもつ意味を解明するとともに、復興へ生かすための提案を示す。

「なもみ」は、野田村で毎年 1 月 15 日の晩に行われる。鬼のような姿の「なもみ」に扮した地元の青年が家々を訪問するという、身体的パフォーマンスが特徴的な行事である。東日本大震災により、道具が流出するなどの影響が出たが、被災後の年も途切れることなく行われている。

筆者は、2013 年 5 月から 2014 年 12 月にかけて、野田村でフィールドワークを行った。その間野田村の「なもみ保存会」のメンバーや「なもみ」復活に携わった人物など 5 名にインタビュー調査を実施し、2014 年 1 月 15 日に行われた「なもみ」行事の参与観察を行った。

考察から、「なもみ」が野田村のローカリティであるということが示唆された。「なもみ」の特徴的な身体パフォーマンスにより生まれる「楽しさ」が伝承の動力であり、「楽しさ」によって村民のアイデンティティが生み出されていると考えられた。また他の被災地において、地域の歴史や背景に注目し身体性を生かした行事を開催することで、インターローカリティを醸成することが可能となり、災害復興に寄与できることが示唆された。（ボランティア行動学）